

題字：木坂  
西野一男さん



KAGAWAKU

# かがやし

生涯学習情報紙：生きがい探しのパートナー

感動人生！ここに生きる元気な人間びと

▶大事なことはメモに



▶石川さんの手元に注目



▶力をあわせて



▶今日の作業は



## ■宮寺農業塾 塾長 石川光公さん(宮寺)

### 活力的な農業を目指して

サクサクと畝

をたてる畝の音、見事に実を結んだナスを収穫するハサミの音が畑に響きます。

宮寺農業塾は、地区の農業の振興を呼び掛けて平成21年の3月に発足しました。塾長の石川光公さん(67歳)は宮寺地区で里芋やウドを中心に栽培している農家の4代目です。農業塾の活動は毎月第2と第4の木曜日の午前中に石川さんが所有するおよそ600平方メートルの畑で行われます。研修は種まきに始まり、手入れなどを中心に行われます。

これらの現状をきちんと把握し、乗り越えなければなりません。幸い地元J-Aから応援の話があり、協力しながらこの塾を始めました。宮寺地区の豊かな自然と共生しながら農業を発展させていくために、出荷できる範囲の必要最低限の農薬で済むよう、鳥から守るネットなどの様々な技術を用いたり、規格に見合った野菜を生産するための工夫など、細かい指導が行われます。

現在、宮寺農業塾には女性3名を含め20人が参加しています。塾生の大部分は農業を営む方ですが、中には退職してこれから家代々の農業を継ごうとする方もいます。また、近々退職するご主人が農業を継ぐため、その手助けをしたいと考え参加する女性もいます。

「これからは今までのように、引退したらそれで終わってしまう農業ではないかと思えます。各農家の持つ優れた知識や技術を共有し、次の世代に伝えていくことが栽培技術の向上につながるのではないのでしょうか。それがきつと地区の農業、地区全体の活性化のきっかけになると思っています。」と熱く語る石川さん。

農業塾を始めたきっかけについて石川さんはこう言います「市内には人の手が入らず荒れた農地を見かけます。この農地を活用するため、農業に参加する人を増やしたい。さらに、農産物を出荷する際には規格や農薬の使用等、厳しい基準があります。農業の活性化をはかるためには

現在、宮寺農業塾の活動に注目が集まり、市内の各地区にも農業塾を立ち上げる動きも出てきているそうです。農業塾をきっかけに地区の発展にまで視野を広げた石川さんの今後の活躍に期待しています。





■老人会「交友会」  
常に前向き 後退なし  
高山多美子さん(黒須)

黒須公民館に、子ども達の元気な声がひびきます。今日は地域の盆踊りの練習日。踊りの輪の中で子ども達に手ほどきをされているのが、黒須地区春日町老人会「交友会」会長 高山 多美子さん(80歳)です。

入間市の老人会は現在77団体あり、女性の会長は8名います。高山さんはその中の1人です。教職を退いてから交友会に入られたとのこと。会員109名余りの先頭に立ち、優しく細やかに、時には厳しくもありま

す。会の中には、色々なクラブがあります。カラオケ、グラウンドゴルフ、旅行、創作等の様々な活動を、会員の希望をとりまわって行っています。また、地域との繋がりも大切に、子ども会や自治会なども協力し合っています。

「むずかしい、大変な事はありませんか、ありましたか？」との問いに「長い人生歩いて来て、大変つらいことや、悲しいことも色々経験し、それが今非常に役に立っています。一つの会を任せられたのには意味があると思います、自分を必要とされているからこそです。常に前向き 後退なし



▲照れるなあ

笑顔



▲いつも元気なメンバーと

▼曲にあっているかしら



川とともに



■黒須さくら広場を守る会代表 新井洋三さん(鍵山)

ヤギが草を食む牧歌的な様相を見せる緑の絨毯をしきつめた草原。それは、入間市武道館の西側を流れる、入間川の土手沿い桜並木下「黒須さくら広場・天空の庭」のことです。

「それまで自然のままにしてあったこの河川敷で、土手のさくらがよく映えるにはどうしたらいいのか。それには周りの環境が重要なのではないかと考えからこの広場造りは始まりました」と、黒須さくら広場を守る会代表 新井洋三さん(52歳)は言います。

新井さんには身体の不自由な息子さんがいます。新井さんは彼に対し、自分ではできないとあきらめないことや、世の中の役に立つことを考える企画力を身につけてほしいと願っています。そのため新井さんの家では、「世の中の人が幸せになる仕組みを考える」をテーマに討論する場を設けています。その席で出されたアイデアの一つがこの広場造りでした。

3年前、新井さんは県から許可を得ると一人で河川敷の整備を始めました。なにしろ1万5千平方メートルもの広大な河川敷です。草刈り、石や流木の除去など、荒れた土地の整地に大変な苦労があったでしょう。

その懸命な新井さんの姿に仲間3人が賛同し、4人が協力して手づくりの広場を完成させました。

新井さんは、市民や行政といったことでなく、自ら出来ることは自ら行うべきとの思いを持っています。この思いをもとに、黒須さくら広場を守る会は県の制度を利用しながら整備作業を続けました。こうして県からも高い評価の得られる広場が完成したのでした。

現在、四季折々様々な顔を見せる黒須さくら広場。会の活動をおしりて、小さな力でも地元を豊かにできることや、活性化のきっかけを作れることを、息子さんに気づいてもらうことができたのではないのでしょうか。

今後、お年よりは静かな憩いの場所を。子どもたちには元気に飛び遊べる広場に。また世代に関わらず地域の人が集まり、ふれ合いの場所になるよう願いを込めてその維持管理に励んでいます。



▲ヤギと一緒にラジオ体操(中央は市のマーク)



■アカザの草から 安西雅之さん(狭山台)  
杖一本から人の輪へ

アカザから杖 いただきました。

ができるの、知っていますか？今回はアカザの杖を仕事の合間に作っている宮寺・二本木の安西雅之さん(56歳)を訪ねました。

《キツカケ》

友人に「杖を作ってみないか」と誘われ軽い気持ちで参加しました。アカザから杖をつくることを聞き、ビツクリしたのを良く覚えています。

《行程》

①アカザの根を掘り、根に付いた石ころを取り除き、余計な根を切り落とす ②水に1〜2週間付け乾かす ③ヤスリをかける ④ニスを塗る。何度も③と④を繰り返し、3ヶ月かけて完成します。

《大変》

仕事の合間に作るので、時間を作るのが一苦労です。

でもそれ以上に、完成した杖を頂きたいという方々に差し上げ、喜んでる姿を目にした時、なんとも言えない嬉しい気持ちになります。

精魂こめて作った杖を喜んでいただければよいのですが、実際には自分の子どものような作品を差し上げるのはちょっと惜しい気持ちも……。

と、冗談をまじえて答えてくださ

《今後》

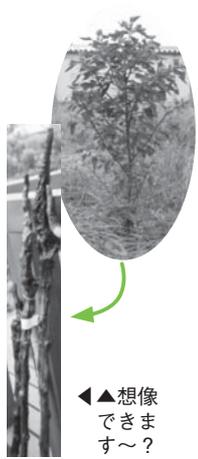
年々、家の周りの空地や畑が減少し、アカザも段々手に入らなくなってきました。今までの様には沢山杖を作れなくなってきたのが現状です。でもアカザの杖の持つ独特の風合いや、作っていく過程での「今度は手に当たる根の形をどういう形にするか、見ようによっては天に昇る竜の様にしてみようか」など、考えながら、ちよつと足を延ばしてアカザを探してみようと考えています。

《後記》

残念ながら安西さんの作った杖を拝見することはできませんでしたが、きっかけを作った友人宅でアカザの杖を見せていただきました。手のひらに当たる部分が何とも気持ちが良いのです。それに加え独特の味わいがあったてすてきでした。

近々、市内の公民館やデパートで見られる機会があるそうです。

楽しみに待っています。



▲想像できず

※アカザ…畑や空地に多い雑草で、若葉はゆでて食用にもされる。歯痛、虫さされなどにも利用される。



■「人間市西武わが街研究会」会長 吉川菊雄さん(野田)  
わが街の歴史発見

西武地区の郷

土史、風習を勉強している「西武わが街研究会」は平成13年5月に、西武公民館に集まった有志で結成されました。その会長を務めているのが、人間市の歴史に造詣の深い吉川菊雄さん(82才)です。

西武わが街研究会では、大正昭和の西武地区の移り変わりや生活・風習全般について、地元の方々に直接聞きとり調査をしています。

「身近にあるものから郷土の成り立ちを学びたいと始まった会ですが、わが街西武を調べるうちに、地元の様々な世代の方とも知り合えました。また、住んでいながら知らなかった事が沢山あって、それらを記録に残し、次世代に伝えていく事が楽しいんです」。

一冊目の「ふるさとの足跡」(平成19年)。二冊目の「わが町の屋号」(22年)とも、地元の高齢者を訪ねて、丹念にお話しを聞き編集しています。

昔を知る方も段々と少なくなる中、地域のために貴重なお話を残したい。また、協力してくださる方の気持ちに応えていきたいと、会員全員が燃える思いで歴史・習慣を調べています。

「先人達の思いを知り、伝えてい



▲会員の汗の結晶2冊の冊子

▼聞き取り調査で歴史を伝える



く事。これこそが温かい地域づくりにつながるべくと信じ、会員全員で地道な研究を続けました」と吉川さんは言います。

現在、昔の習慣は廃れて、何でも簡便な暮らしへと流されています。地域の結び付きも薄れ、人間同士のふれあいも少なくなっていく一方です。そういう中で、わが街研究会の活動が地元の活性化や世代間の交流の一助になっていくのではないのでしょうか。

次の調査は、各家や一家(同姓の一族)における屋敷守の神仏に決定。好奇心旺盛な会員の熱意の炎は消えません。



サッカー少年団高倉イレブン代表・監督 小松達雄さん(高倉) 子どもたちの夢をふくらませて30年

「楽しい、楽

しむ、楽しさ至上主義をモットー」に高倉イレブンを立ち上げてもうすぐ30年になる、代表・監督の小松達雄さん(63歳)の姿が高倉小学校のグラウンドにありました。

毎週土日・祝日の午後、市内各所から集まってくる児童たち75名は、彼のもとで、雨の日以外は休まず練習。入団時に卒団するまで継続する事を約束している、途中退団する子はほとんどいません。

30年前個々にボールで遊んでいる小学生を見た時に感じたことが、団を立ち上げたきっかけでした。「スポーツは、集中力や時間を上手に使う事を覚えます。そして、体力をつけ心を豊かにし、人とのふれ合いを大切に、礼儀や忍耐を身につけて行きます。この素晴らしいさを共有しよう」と育成に取り組み始めました。

毎年、春と夏の休みには合宿を行い、静岡の少年チームと年2回の交流試合を23年間続けています。友好と親睦を兼ねたりバーカップ争奪戦は、埼玉と静岡で交互に実施されます。今年の春は、入間で行われ、この時静岡の団員たちをホームステイとして、入間の団員宅が受け入れ、お互いに親睦を深めました。

その他200試合をこなすなど、日々の積み重ねが良い結果につながっていきます。

卒団した子どもたちは、社会人になり、親になり、そしてこのグラウンドに戻ってきます、父さんコーチとして・・・現在コーチは18名、Jリーグで活躍している卒団生の西澤代志也(にしざわよしや)選手も時間ができると指導に来るそうです。

子ども達は口をそろえて言います。「ここへ来るのが楽しい。サッカーが楽しい、うまく行った時、ほめてくれるから・・・」と。これからも大きな大きな夢を子どもたちに与えて下さい！



▲負けず嫌いの精神で！



▶向かって燃える団員たち...

第16回いるま生涯学習フェスティバル

テーマ：ザ・体験 楽しさ発見 さあ行こう！

生涯学習してみませんか？ 学ぶ楽しさを見つけに、会場へさあ行こう！  
見て 聞いて 感じる体験型イベントに加え、講演会や電気自動車の試乗体験などが目白押し！！

日時：平成22年11月14日(日) 埼玉県民の日  
午前9:45～午後3:45  
場所：入間市産業文化センター・図書館・児童センター  
共催：入間市・入間市教育委員会・(財)入間市振興公社  
入間市生涯学習をすすめる市民の会  
主管：第16回いるま生涯学習フェスティバル実行委員会



編集後記

●友だちから、季節ごとに届く絵手紙は、人の心を和ませてくれる、すばらしい便りです (H)

●自らの歴史をつくり継続していかうとかがやいている人達との出会いを大切にしていきます (I)

●耳に届ける文章から目に届ける文章へ。あまりの変化と難しさにとまどっている毎日です (MK)

●野に咲く名もない雑草にも意味がある。遠い昔の人々の知恵が今に伝わる、大事に伝えていかなければ (MK)

●人間、一人では何も出来ません。これからは世代を越えた居場所づくりが必要だと思います (N)

●人生で培ってきたものを皆と惜しみなく共有する事は、夢を叶える第一歩になるのですね (SM)

●輝く努力の成果を持つ数多くの人に、スポットを当て紹介してまいりたいと思います (ST)



企画編集：「かがやく」編集委員会  
発行：入間市教育委員会生涯学習課

お問い合わせ 事務局  
入間市教育委員会生涯学習課  
〒358-8511 入間市豊岡 1-16-1  
TEL 04-2964-1111(内線4123) FAX 04-2964-4841

